県民参加 NPO等協働 通信

このコーナーでは、県民参加の活動事例やNPOなどとの協働事例を紹介します。

～市民に愛される大堰川の河川空間をめざして～

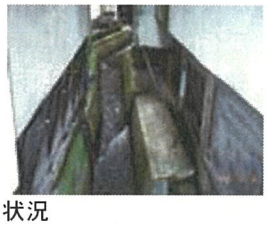
1　はじめに

大堰川は花巻市の中心地を流れ一級河川北上川水系豊沢川に注ぐ、延長約８ｋｍ（内指定区間１．２ｋｍ）、流域面積約４ｋ㎡の県管理河川です。

上流域は水田地帯でその用排水路となっており、下流市街地は下水路の形態を呈しており、江戸時代には花巻城のお堀としての役割がありました。

全区間にわたり三面張水路であり、都市河川で家屋が川岸まで密集し家庭排水が流入してその水質は悪く、河床はぬるぬるしていて近づく状況にはありませんでした。（平成元年：ＢＯＤ４０ｍｇ／１）

中心市街地のこのような状況のなか、一方周辺では新幹線新花巻駅、ＪＨ花巻南インターの開設が相次いだことを契機に、花巻市では昭和６２年「定住拠点構想」を策定し町づくりに着手。その中で当大堰川周辺は水辺の散策路「レインボープロムナード」として位置付け、河川は県が、散策路や植栽は市が整備することとして進められたものです。



着手前の状況

2．事業の概要

狭窄部を解消するとともに、歴史ある中心市街地に安らぎと潤いを与える水辺空間の創造をめざすことを目的とし、平成８年度に着手。河川整備として河川再生事業の認定を受け、統合河川整備事業に引継ぎ平成 15 年度に完成しました。

花巻市においては別途プロムナード整備事業(事業費７億円)として河川周辺の園路舗装、防護柵、植栽、照明等を平成 16 年度まで行うこととしています。なお、計画にあたっては、市民有志による「魅力ある大堰川を考える会」を設立し、地域の意見を取り入れて策定しました。

3．市民とのかかわり

「考える会」による計画策定後においても、工事期間中随時回覧版や商店へのチラシ配布により、工事だより、現場見学会を案内し、懇談会を開催してその意見を現場に反映させるよう工事に努めました。

一例としては、階段護岸への手摺の設置、植栽は背丈の小さいものを、飛石、観光客銘版の移設が挙げられます。

特に銘版においては、以前商店会が主催して観光客の花巻への思いを募集し、鉄板に刻んだ銘版を商店街歩道に布設していたもので、アーケード工事により撤去された経緯がありました。その銘版の評判がよく、「復活」の市民の声により今回大堰川散策路に再現されることとなったものです。

また、イメージアップの一環として、「夢灯り製作教室」を開催しました。土木の主な材料であるセメントとボイド管で夢灯りを製作し、出来たばかりの階段護岸に点灯しました。

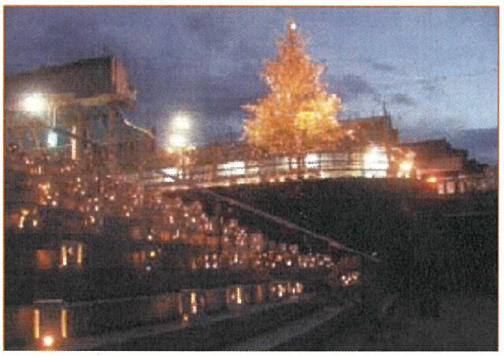
材料のみを支給し、製作や飾り付け、点灯準備やらロウソクの負担は参加者が自ら行うこととし、自主参加型のイベントとして企画しました。周辺商店会の婦人部を中心に積極的な参加を得、３ 回開催し計約 150 個を製作しました。型枠作りは「切絵」、モルタルの流し込みは「どろんこ遊び」となって、子どもは楽しく、大人は昔なつかしく夢中で作業し、喜ばれたことがこちらとしても嬉しかったです。

材料がモルタルであることから２～３ｋｇと、通常の石膏にくらべ重いので並べる作業がたいへんでしたが、強風でも倒れず評判がよかったです。無機質であるハズのモルタルですが、製作した人の思いが込められ何とも言えない出来映えになりました。

点灯は秋祭り、クリスマス、バレンタインデーに行い、夢灯りに併せて青年部が周辺にイルミネーション、ライトアップを配置し、商店街が明るくなりました。

工事が終わった後も継続して「夢灯り」が開催されることと確信し、そのきっかけに携わった者としてうれしく思います。

河川という場を市民に提供でき、地域がそれを利用することで愛される河川となり、本来の川になっていくものと感じています。



夢明かりとイルミネーション

４．施工として

従前の三面張水路を打ち破り、透水性を確保する他、施工にあたっては、市街地施工であること、城下町であること、動植物の再生とともに親水性に配慮することとして進めてきました。

護岸は城下町にふさわしく自然石の空石積（アンカータイプ）を主とし、底部には植生ロールを配し水際の回復に努めました。

河床には砂防工事で発生した巨石を配置して変化をもたせました。

↑既存護岸の活用

左岸ビオフィルム⇒

階段護岸は極力幅を広くし、親水性、利便性を考慮するとともに、飛石で落差工を形成しました。

橋梁たもとに自生していたケヤキは伐採しないこととし、木柵土留で保護しました。

結果、現在では、やさしくなった川の流れに魚やカモが、石積護岸には植物やトンボ、ヘビまでも戻ってきました。

小学生が学校帰りにここを通り、石垣や飛石、階段で遊んでいる姿が見かけられます。「危ない」と言う婦人の声もありますが、「これでいいのだ」と思います。着工前の状況を考えると、とても信じられない光景です。

けやきの保護策

５．おわりに

大堰川はこれまで、市民から「水路」「下水」としてイメージされていました。一昔前ですと、「コンクリート三面張がきれい」「下流へ流れればいいのであって、土砂や草はゴミが引っかかる原因になって邪魔者扱い」とされ、水質は悪化し生物に縁のない空間となっていました。それがあたりまえでした。

この事業を契機に住民と対話する機会が増え、そのなかで変化する大堰川を見ることにより、市民の意識も変化してきていると感じます。

砂利や草があるからこそ「川」でありそこに生物が生息し、それが水質改善に役立っていることに気づかされたのです。

川だから「近づきたい」と感じるのです。「水路」では近づきたいと感じないのです。今では「川」としてイメージされるようになってきました。

イベントの場として利用されたり、子どもが遊んだりサラリーマンやＯＬが散策しているのを見ると「川」になってきたなと感じます。

まちづくりはハード・ソフト両面から、そこに集うモノ（者、物）、自然、生命が融合しあいながら潤いのある空間が創造できればと思います。

賢治のイーハトーブ（理想郷）の精神もそんなところにあるのではないでしょうか。

（花巻地方振興局土木部　志田悟）